

子どもの健全育成に関する児童館の機能価値の研究

富田 久枝 (児童学科・准教授)	鈴木 樹 (教育学科・准教授)
白川 佳子 (初等教育学科・准教授)	西島 大祐 (初等教育学科・講師)
田爪 宏二 (子ども心理学科・准教授)	藤井 佳世 (教育学科・講師)
平井 悠介 (児童学科・講師)	大滝世津子 (児童学科・講師)
米山 弘 (児童学科・教授)	川口 和英 (東京都市大学・准教授)
望月 重信 (明治学院大学・教授)	野中 賢治 (本学非常勤講師)

1. 研究目的 (問題と目的)

本学では、小学校教員、幼稚園教員、保育士といった教育に携わる人材の育成を行っているが、児童福祉の新たなエキスパートとして注目される児童厚生員の育成も行っている。このような大学は日本でも有数であり、これからの人材育成やより良い教育環境について検証し提言をしていく使命を担っているとも言える。

近年、子どもを取り巻く環境は、社会の激しい変化に伴い、悪化の一途を辿っている。子育て不安や虐待といった子育て基地である家庭の機能が危ぶまれ、居場所を失った子どもたちは、引きこもり、不登校、いじめ、非行といった問題行動を引き起こし、深刻な局面を迎えている。児童館は児童福祉法第40条に基づき、子どもや家庭を支援するために作られた施設であり、子育て支援の拠点としても最近、注目を浴びている。子どもたちが健やかに成長していくために、それを温かく育む環境として、地域の核となる施設として期待されている。

しかしながら、児童館はこのように地域に根ざし、子ども達の健全育成の拠点として注目されてはいるが、その社会的な機能や価値について客観的にまだ検証されていない。そこで、本研究では以下の2つの目的で研究を進めていこうと考えている。

- (1) 児童館が実際、社会でどのような役割を担い、どのような価値を生み出しているかといった機能価値について国内・海外の実態を検証し、これからの児童館の新しい方向性を模索、検討する。
- (2) 期待される社会的機能価値に貢献できる人材育成の方法や内容を提言する。

2. 研究計画

〈1年目：平成19年度〉

- (1) 文献研究 (児童館の現状と実態)
- (2) 国内における実態調査 (東京都内の児童館視察) とそのまとめ
- (3) アメリカにおける実態調査とそのまとめ

〈2年目：平成20年度〉

- (1) アメリカの実態調査の学会発表 (日本保育学会)
- (2) 国内における実態調査の実施
アンケートの作成

全国アンケート調査の実施

< 3年目：平成21年度 >

- (1) アンケート調査の分析と学会発表（日本発達心理学会）
- (2) 本研究の総括

3. 研究の結果

(1) 研究1：国内における実態調査（東京都区内の児童館視察）

研究1は初年度の研究であったため、研究メンバーの児童館に対する認識にばらつきもあり、国内の児童館（目黒区を中心に）視察を実施した。以下に視察した児童館および視察者について報告することとする（Table 1）。

視察の観点として、①児童館の概況、②児童館が行っている取り組み（子育て支援活動も含む）、③地域コミュニティと児童館との関連性について、④その他気づいたことの4項目から実態を明らかにしようと考えた。

視察日時・視察児童館	視察者
① 平成19年7月6日（金）午前10時～11時 鵜沼こどもの家（鵜っ子とりで）：神奈川県	白川 佳子 平井 悠介
② 平成19年11月16日（金）午前10時～11時 烏森住区センター児童館：目黒区	平井 悠介
③ 平成19年11月16日（金）午後1時～1時半、6時～7時 上目黒住区センター児童館：目黒区	平井 悠介 富田 久枝
④ 平成19年11月16日（金）午後1時～2時 八雲住区センター児童館：目黒区	藤井 佳世
⑤ 平成19年11月16日（金）午後2時～3時 向原住区センター児童館：目黒区	藤井 佳世
⑥ 平成19年11月19日（月）午前10時～11時 駒場児童館：目黒区	白川 佳子
⑦ 平成19年11月20日（火）午前9時30分～10時30分 中目黒住区センター児童館：目黒区	大滝世津子 西島 大祐
⑧ 平成19年11月20日（火）午前11時～12時 区民センター児童館：目黒区	大滝世津子 西島 大祐
⑨ 平成19年11月20日（火）午前10時～11時 五本木住区センター児童館：目黒区	田爪 宏二
⑩ 平成19年11月27日（火）午後4時～5時 緑ヶ丘児童館：目黒区	鈴木 樹 大滝世津子
⑩ 平成20年2月13日（水）午前10時～11時半 大野南こどもセンター：相模原市白川佳子	川口 和英

上記の児童館について、各視察者が報告書をまとめ、12月の定例会で発表を行った。

その結果、今回は視察許可をいただいた児童館は目黒区を中心であったため、その運営や概況は同じような結果で、目黒区は小型児童館を中心に展開して住区という分け方で地域密着型の児童館運営で近隣の利用も非常に盛んであった。また、児童厚生施設として学童保育も実施しており、職員の大半が有資格者であった。しかし、鎌倉市や川崎市などは児童厚生施設として児童館は無く、ボランティアがその運営を行っている。このように行政の方針によって児童館も運営自体かなり違うことが分かった。

これらの各報告書から全国レベルでの調査が必要と考え、全国対象で行う児童館アンケート作成の調査項目の検討を行った。

(2) 研究2：海外（アメリカのチルドレンズ・ミュージアム等における実態調査

① 視察日程

- 8月31日（金）ボストン・チルドレンズ・ミュージアム
- 9月1日（土）マンハッタン・チルドレンズ・ミュージアム
- 9月2日（日）ブルックリン・チルドレンズ・ミュージアム
- 9月3日（月）セントラルパーク内 アドベンチャープレイグラウンド

② 視察者：白川佳子、西島大祐

③ 視察結果

今回はアメリカの東海岸を中心に、チルドレンズ・ミュージアムとアドベンチャーグラウンドを視察した。これらの施設は、日本でも近年急速に増えつつある「大型児童館」のモデルになっているものもある。しかし、地域密着型の現在の日本における小型児童館とはその機能価値が全く違うことが分かった。研究2のまとめとして保育学会において研究成果の発表（口頭発表）を白川・西島・富田の3名で行い、参加者の方々から貴重なご意見を頂くことができた。以下に、発表の概要を示す。

〈アメリカのチルドレンズ・ミュージアム等の教育施設の視察報告：1〉

——施設スタッフへのインタビューやプログラム活動の観察を通して——

報告者：白川佳子・西島大祐・富田久枝

◇ボストンC. M.

ボストンのチルドレンズ・ミュージアムは歴史が古い施設で、2007年4月に大規模な改装が行われた。建物は三階建てになっており、1階のロビーを入ると3階まで吹き抜けの昇降遊具（Climb）の他、運動遊び（Kid Power）、科学遊び（Science Playground）、体験型ミュージカル（KidStage）、2階には水の遊び（Boats Afloat）、常識学習（The Common）、物語遊び（Arthur & Friends）、音楽遊び（Airplay & Blue Man Group）や3歳までの親子の遊び場（PlaySpace）があり、3階には黒人の生活（Boston Black）、構成遊び（Construction Zone）や日本の文化紹介（Japanese House）があった。

施設のターゲットは0歳から10歳の子どもであり、スタッフは月に1回程度研修を行っている。基本的にスタッフは子どもたちの遊びを見守る立場にあるように感じた。スタッフが子どもたちと積極的に関わっている場面は、KidStageにおけるミュージカル「3匹のこぶた」と3歳以下の親子の遊び場であるPlaySpaceでの描画コーナーであった。チル

ドレンズ・ミュージアムの中でも特に規模が大きいボストンC.M.の特徴は、4歳以上の子どもたちに対しては体験型の遊具で自主的に遊ぶ環境を用意し、3歳以下の親子については親子が落ち着いて過ごしながらか関係を促進するような遊具を用意し、限られた時間帯だけはスタッフが用意したプログラムで親子と一緒に遊ぶシステムになっている。

◇マンハッタンC.M.

マンハッタンC.M.は市の中心部にあり、地下1階から地上4階までのレンガ作りの建物である。地下1階には、積み木コーナー（5歳以上対象）、地上1階には、ギリシャ神話の展示（6歳以上）、2階には探索コーナー（2～6歳）、3階には遊びコーナーと4歳以下の教室、4階には5歳以上の教室があった。マンハッタンC.M.ではニューヨークの大学と共同で遊具の開発や子どもの発達について研究をしており、それらを施設の中に生かしているとのことであった。スタッフの中にはエデュケーターと呼ばれる先生役の人たちが、子どもたちに関わっていた。特に、お絵描きコーナーでは、参加の子どもたちにエプロンをつけたり、キャンパスの準備など遊びの環境を整えるなどをエデュケーターが常時対応していた。また、展示されている遊具は文字習得や物の属性などの知育系のものが多く、保護者向けにどのように子どもに関わったらよいかについてのインストラクションが表示されていた。

◇ブルックリンC.M.

ブルックリンC.M.は黒人が多く居住するブルックリン地区にあり、チルドレンズ・ミュージアムの中では小規模な平屋建てになっている。2008年2月頃に改装が完了する予定で、このミュージアムの特徴は、平屋の中に階段状の傾斜があり、それぞれのコーナーをトンネルで繋げている。そして、ピザ屋さんごっこコーナー、ステージコーナー、生物の展示コーナー、植物コーナーなどがあり、毎日のプログラムがお昼から夕方5時頃まで5歳未満と5歳以上にわけて用意されており、それぞれのプログラムに担当のエデュケーターが決められていた。エデュケーターの方にインタビューしたところ、月ごとに毎日のプログラムを計画しており、参加する子どもたちは近所の子どもたちが多く、毎日通ってくる子どもたちもいるとのことであった。両親が共働きのため一人で過ごさなければならない子どもたちの安全な遊び場となっており地域のニーズにあった施設であると感じた。

〈アメリカのチルドレンズ・ミュージアム等の教育施設の視察報告：2〉

——冒険遊びの視点から見た日米比較の検討を通して——

報告者：西島大祐・白川佳子・富田久枝

◇ボストンC.M.

運動遊び（Kids Power）のコーナーでは“Power Launch”のような身体を使って物を引いたり動かしたりするような遊具や、“Rock the Power”のように子どもが楽しむためのクライミング・ウォールなどの遊具があった。特に“Rock the Power”ではクライミング用のヘルメットが常備されているなど、本格的なクライミングを体感できるようになっていた。身体を大きく使って物をよじ登るような遊具が多く目立つコーナーであった。この施設には子どもの冒険心を掻き立てるような遊具が多くあったが、冒険遊びや冒険教育といったようなコンセプトを特別持っているというわけではないということだった。

◇マンハッタンC.M.

大きさ、長さ、形、上下などの概念、言葉などを学べるような知育系の遊具が中心に置かれている施設であった。あまり冒険遊びといったテーマの遊具や活動は見られる施設ではなかったが、Dora というキャラクターが探検をするといったテーマの展示が見られた。

◇ブルックリンC.M.

黒人街の中に位置する、地域密着型の施設である。動植物に触れるプログラムなどは豊富で、子どもの自然に対する好奇心を高めるような活動が多く見られた。

◇セントラル・パーク内レクリエーション・センター (North Meadow Recreation Center)

このレクリエーション・センターにはアドベンチャー・プログラム施設があり、その他にもテニスコート、バスケットコート、創作室などがある。セントラル・パークのアドベンチャー・プログラムでは子どもの問題解決能力や適応能力、リーダーシップ能力などを高めることを目的とした冒険的教育活動が展開されている。アドベンチャー・プログラム施設には室内外のクライミング・ウォールが設置されており、8歳～17歳を対象として週1回の解放日と週2回のクライミング指導日がある。

まとめ

アメリカの教育施設には子ども向けのクライミング施設が日本よりも普及されており、充実していると感じた。日本においてもそのような施設が充実されてくることで、子どもの冒険遊びが深まるきっかけになるのではないだろうか。また、冒険遊びを考える際に、Outward Bound School や Project Adventure などが行う冒険教育とのコンセプトを比較検討する必要があるだろう。今後は今回の視察結果をさらに深く検討することによって、日米の冒険遊びや冒険教育に対する比較検討を進め、様々な教育施設における機能価値について研究を深めていきたい。

(3) 研究3：研究会の開催およびアンケート調査の実施

研究3では、これまでの研究1、2の総括として今後の日本における児童館の価値機能を検討し、さらに地域の子どもたちの健全な育成において児童館は今後、どのような役割を担っていく必要があるのかを検討する必要があると考えた。また、研究1の結果から地域に根ざした児童館の必要性があると考え、本研究では地域密着型の児童館（小型児童館）を対象に、以下の要領で全国調査を実施した。具体的には全国児童館リストから小型児童館を各都道府県から最低1件は対象にできるように配慮して奇数番号を中心にランダムに1684件抽出した。抽出された児童館への実際の送付は送付業者により一括郵送配布を行った。回収は返信用封筒を同封し、各児童館から郵送返送できるように配慮した。また、アンケートは53項目からなり、4～1の選択肢（4件法）で構成されている。なお、アンケートの項目は表1に示す通りである。本稿では調査およびその結果の概要について述べる。

① 調査の概要

子どもにとっての望ましい遊び環境としての児童館のあり方を検討するため、全国の児童館に対して児童館の目的や運営、利用者からのニーズの実態に関する質問紙調査を実施した。全国の児童館から無作為に選択した1684の児童館に質問紙を送付し、629施設から

回答が得られ（回収率37.4%）、有効回答は616施設であった。回答のあった児童館の基本属性は表1の通りである。

② 児童館運営における重視事項

児童館の運営の目的に関して、図1に示す項目についてどの程度重視しているかを4件法で質問した。図1は、回答を得点化し、因子分析により抽出された因子ごとわけて示している（以下③、④においても同じ）。因子1（地域への貢献）においては、「地域および地域住民との交流」、「児童館の運営や企画への子どもの参加」といった、地域の児童館活動としての内容が特に重視されていた。因子2（教育的側面）においては、どの項目も重視されていた。

表1 アンケートの項目の構成（全53項目）

1. 児童館の概要について（11項目）	
<ul style="list-style-type: none"> ・名称、所在地、開設年、設置運営主体（公設公営・公設民営、民営）、 ・施設の規模（屋内、屋外、収容可能人数、子どもの遊戯室等の数） ・隣接・併設する施設（公園、公民館、小学校、中学校、幼稚園、保育所） ・運営時間（平日、休日） ・事業対象（乳児、幼児、小学生、中学生、高校生、成人、高齢者） ・子どもに対応しているスタッフ数、ボランティアの受け入れ ・主な利用者の居住地域（徒歩、自転車、自動車や電車） 	
2. 運営の目的について（16項目）	
<ul style="list-style-type: none"> ・表現力や創造力を高める ・屋外活動による心身の健康 ・自然体験 ・地域及び住民との交流 ・子育てのネットワークング ・放課後児童対策 ・障害者への対応 ・子ども参加型運営 	<ul style="list-style-type: none"> ・体力の増進 ・自主性を伸ばす ・社会性やコミュニケーション力 ・地域文化の伝承 ・子育て相談機能 ・中学・高校生への対応 ・クラブサークル活動 ・講座やワークショップ
3. 施設設備について（12項目）	
<ul style="list-style-type: none"> ・工作・製作場所と用具 ・自然体験遊具や環境 ・運動・スポーツ施設 ・表現設備（舞台等） ・乳幼児・保護者スペース ・安全性への配慮（遊具） 	<ul style="list-style-type: none"> ・気分開放部分 ・動物、生き物との触れ合い ・冒険遊び施設や環境 ・科学的な体験設備 ・母親交流スペース ・図書館等情報提供
4. 利用者のニーズについて（11項目）	
<ul style="list-style-type: none"> ・安全な遊び場 ・保護者同伴行事・イベント ・放課後児童対策 ・親子交流の場 ・子育てネットワークング ・問題をもつ子どもへの対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どものための行事・イベント ・地域全体の行事・イベント ・専門知識を持った人材への要望 ・地域社会との交流の場 ・子育て相談
5. 自由記述項目（3項目）	
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの遊びや対人関係 ・子どもや保護者、地域に果たす役割 ・特色ある取り組み（独自の取り組み） 	

その中でも特に「集団での遊びを通して、社会性やコミュニケーション力を身につける」「子どもの自主性を伸ばす」といった、子どもの内面に関する内容が重視されていた。因子3（屋外での自然体験）においては「自然体験（公園や野外での活動）」における重視度がやや低いが、立地などから屋外での活動が制限される児童館もあり、環境的な条件が影響していると思われる。因子4（子育て支援）においては、いずれの項目も重視度が高く、児童館が子どもの遊び場とともに子育て支援の場としての機能を重視していることが伺われる。

③施設、設備の設置状況

児童館における施設、設備に関して、図2に示す項目についての設置状況を3件法で質問した。因子1（家庭では出来ない活動のできる施設）においては、「自然体験的な遊具や環境」の設置の割合が高いが、他の項目に関しては各児童館の特性によるものであると考えられ、全体的な設置の割合は必ずしも高くはないが、いずれの項目も2割程度の児童館には設置されている。因子2（子育て支援設備）においては、特に「母親同士の交流スペース」の設置の割合が高く、児童館に母親の居場所を設け、それによって子育て支援としての機能を充実させようとしていることが伺われる。因子3（一般的な設備、遊具）についてはいずれも設置の割合が高いが、特に図書、工作といった、情報や遊びを提供する施設の設置の割合が高いことが伺える。

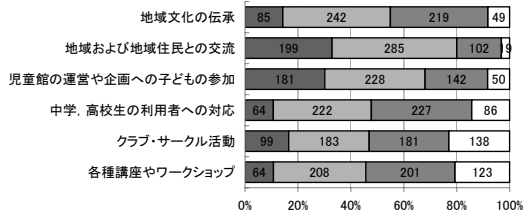
④保護者をはじめとした利用者からのニーズ

児童館がより有効な機能を果たすためには、利用者からのニーズを適切に取り入れることも必要であると思われる。ここでは、主な利用者である子どもの保護者からの、（児童館が認識している）ニーズの多さに関して、図2に示す項目について4件法で質問した。因子1（子育て、専門的な支援に対するニーズ）においては「子育てのネットワーキング」に関する要望が特に多く、子育てに関する具体的な支援よりもむしろ、そのような場づくりに対するニーズが高いことが伺われる。因子2（地域交流に対するニーズ）においては、特に「子どもと保護者が参加するイベント・行事」が、つまり地域全体のイベント以上に子どもおよび保護者のためのイベントに対するニーズが高かった。因子3（子どもへの遊びの支援に対するニーズ）においては、すべての項目でニーズが高く、因子2の地域交流よりも子どもの遊び場へのニーズの高さが伺われる。

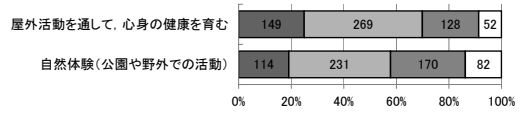
⑥さいごに

本調査の結果、児童館の目的や運営、利用者からのニーズの実態を伺うことが出来た。本稿では、児童館を対象にしたアンケートについて主に数量的な面から分析したが、アンケートではその他にも各児童館に「子どもの遊びや対人関係についての考え」、「子どもや保護者、地域に果たす役割」、「特色ある取り組み」について自由記述による意見を求めている。今後、これらの質的な情報を詳細に分析し、児童館の持っている教育的、社会的機能を明らかにするとともに、特色のある取り組みについての事例的検討を行なう必要がある。

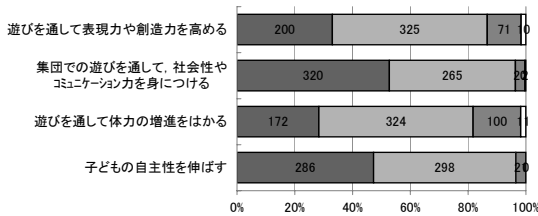
■とても重視している □重視している □あまり重視していない □重視していない



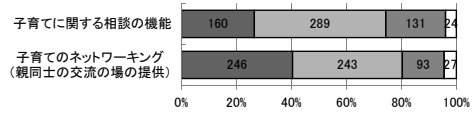
因子1：地域への貢献



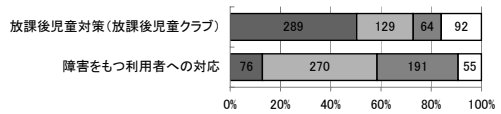
因子3：屋外での自然体験



因子2：教育的側面（子どもの能力の向上）



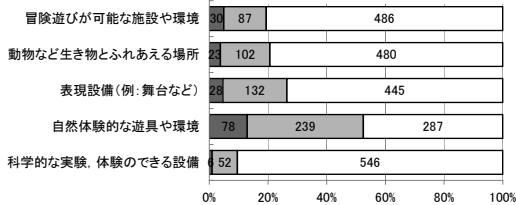
因子4：子育て支援



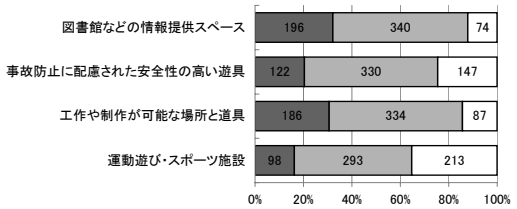
(因子に含まれない項目)

図1 児童館運営における重視事項

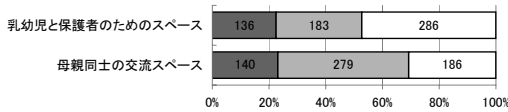
■重点的に設置 □設置している □設置していない



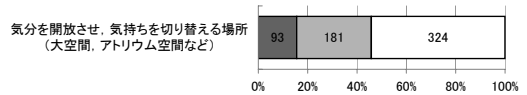
因子1：家庭では出来ない活動の出来る施設



因子3：一般的な設備、遊具



因子2：子育て支援設備



(因子に含まれない項目)

図2 施設、設備の設置状況

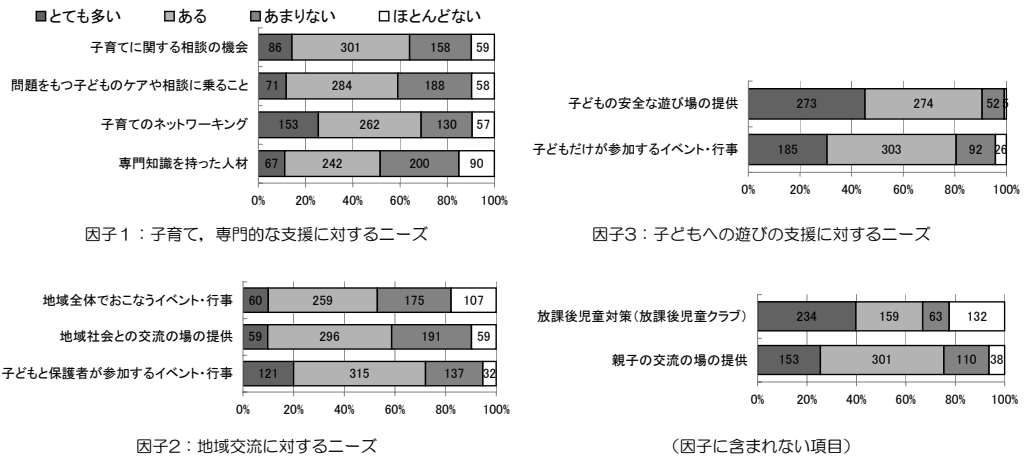


図3 保護者をはじめとした利用者からのニーズ